

幕末のお台場普請と伊豆石丁場遺跡群

品川区立品川歴史館
学芸員 富川武史

はじめに

1. ペリー来航と品川御台場普請

(1) お台場(御台場)と石丁場

御台場

- ①御台場 ②台場 ③御砲台 ④砲台 ⑤御石火矢台

地名を付けて名称を定める。諸外国の脅威から日本を防御するため、海岸線に建設された砲台で、全国に点在。国際貿易都市長崎での普請が最初。「お台場」は①に由来。

普請の主体者→幕府の場合は将軍、藩の場合は大名を指す。「御」は尊称。

幕府主導の御台場でも、警備するのは大名であり旗本。

「お台場」といえば、幕末に造られた品川御台場が象徴的な存在として知られる。嘉永6年(1853)8月末から翌安政元年12月末、文久3年(1863)5月から元治2年(1865)頃の2度にかけての普請。嘉永・安政期は、江戸城築城以来、約220年の幕府直轄の大土木工事

品川御台場の名称各種

- ①内海御台場 ②品川御台場 ③品川沖御台場 ④品川台場

↓

築造地である江戸湾内海品川沖は海上であり地名が存在しなかったため、史料には複数の名称が登場。幕府側の史料には①、構築資材調達側の史料には②③が比較的多い。

石丁場

- ①石丁場 ②丁場 ③石場 ④石切場

石材を切り出し、加工する作業場。伊豆半島には約170ヶ所の石丁場が遺跡として確認されている。

(2) ペリー艦隊の江戸湾来航と御台場掛の発足

アメリカ東インド艦隊（ペリー艦隊）江戸湾来航

①嘉永6年（1853）6月→黒船4隻で浦賀に来航。久里浜で外交交渉。

②嘉永7年（1854）正月→黒船7隻で来航。横浜で外交交渉。日米和親条約締結へ。

①の後、嘉永6年7月23日に筆頭老中阿部正弘が「内海御警衛御台場」の普請を命令

→勘定奉行松平近直・川路聖謨、勘定吟味役竹内保徳、勘定吟味役格江川英龍宛

同年8月28日、内海御台場御普請并大筒鑄立御用掛（御台場掛）が江戸城で発足

→発足当初68名（勘定方41・目付方27）。最終人数112名（勘定方72・目付方40）

ただし、老中、若年寄を除く。ペリー来航後に発足した新設の掛では他に類例がないほど大規模な組織

品川御台場は、ヨーロッパの築城書や砲術書（蘭書）をテキストに設計されたが、蘭書の活用は平面プランや各御台場の役割、大砲鑄造とその配置などにある程度限定され、在来の築城術と土木技術を転用して普請された。

(3) 品川沖に集う構築資材【図1】

石材、木材、土砂、明俵、野芝などで構築

御台場掛の主導。掛の役人が出張し、江戸湾・相模湾・駿河湾に跨がる地域から構築資材と人足を調達

↓

普請現場近くの如来寺に掛の本部（元小屋）を設置。東海道筋の情報発信・受信の起点となる東海道品川宿をはじめ、要所に代官所役人が常駐し、代官所領内の宿町村への情報伝達と構築資材搬入の差配などを行う。

とにかく早く、正確に、迅速な情報を伝達し、構築資材を調達する必要があった。

→代官支配体制を活用し、通常の「廻状」と時間を指定した「刻付廻状」で名主を経由して通達。諸藩にも協力を求める。

小田原藩領では、幕府→藩主→郡奉行→代官→手代→村役人の流れで情報伝達か？

品川御台場で使われた石材の種類

①石垣石・割栗石

・安山岩、凝灰岩を産出する伊豆半島の各石丁場（伊豆石丁場）を使用

・凝灰岩、土丹岩を産出する房総半島の明鐘岬の石丁場を使用

②砂利

→割栗石とともに裏込め資材として使用。築城の裏込めでは使用が確認されていない。

③土丹岩（泥岩・シルト岩）

→下埋め資材として、磯子村（現、横浜市）、逸見村・長浦村・横須賀村（現、横須賀市）などの石丁場を使用。

2. 伊豆石丁場の石材調達—その所在と小田原藩領石方六ヶ村の切り出し—

(1) 品川御台場普請における伊豆石丁場【図2】

寛永11年（1636）、江戸城築城に伴う石丁場74ヶ所 相模国早川から伊豆国重寺伊豆の代官から熊本藩細川家が得た情報（『伊豆石場之覚』『伊東市史』史料編近世Ⅰ）

品川御台場普請（1次・2次）の普請で確認できる石丁場所在地30ヶ村。但し、伝承含む

①嘉永6年（1853）～安政元年（1854）→東海岸の安山岩丁場を中心に切り出し

②文久3年（1863）～元治2年（1865）頃→南・西海岸の凝灰岩丁場を中心に切り出し

表1 品川御台場普請における伊豆石丁場所在地一覧

	石丁場所在地		現住所	領主	採石時期
1	石橋村	相模国足柄下郡	神奈川県小田原市	小田原藩	①・②
2	米神村	同上	同上	小田原藩	①・②
3	根府川村	同上	同上	小田原藩	①・②
4	江之浦村	同上	同上	小田原藩	①・②
5	岩村	同上	同足柄下郡真鶴町	小田原藩	①・②
6	真鶴村	同上	同上	小田原藩	①・②
7	吉浜村	同上	同湯河原町	小田原藩	①・②
8	門川村	同上	同湯河原町	小田原藩	①・②
9	伊豆山村	伊豆国賀茂郡	静岡県熱海市	伊豆山権現社	①
10	多賀村（上・下）	同上	同上	旗本鈴木氏	①・②
11	湯川村	同上	同伊東市	旗本大久保氏	①
12	新井村	同上	同上	幕府	①
13	川奈村	同上	同上	沼津藩	①
14	白田村	同上	同賀茂郡東伊豆町	幕府	①
15	稲取村	同上	同上	沼津藩	①
16	見高村	同上	同賀茂郡河津町	幕府、旗本間宮氏	①
17	河津郷	同上	同上	幕府、沼津藩	①
18	下田外浦	同上	同下田市	幕府	②
19	須崎村	同上	同上	幕府	①

20	柿崎村	同上	同上	幕府	①
21	本郷村	同上	同上	幕府	①
22	下加茂村	同上	同賀茂郡南伊豆町	旗本三枝氏・溝口氏	②
23	手石村	同上	同上	幕府	②
24	雲見村	同上	同賀茂郡松崎町	旗本大久保氏	①・②
25	岩地村	同上	同上	旗本蜂屋氏	②
26	安良里村	伊豆国那賀郡	同西伊豆町	旗本間部氏	②
27	土肥村	伊豆国君沢郡	同伊豆市	幕府	②
28	井田村	同上	同沼津市	旗本酒井氏	(未詳)
29	口野村	駿河国駿東郡	同上	沼津藩	①
30	獅子浜村	同上	同上	沼津藩	①・(未詳)

※No.28 井田村は、地元住民からの聞き取りにより向山丁場が該当。ただし、切り出し時期は未詳（沼津市歴史民俗資料館情報提供）。

※No.30 獅子浜村のうち、大久保山丁場は切り出し時期未詳（同上。『大久保山の生涯』に記載）。

※No.30 獅子浜村のうち、楞巖院境内丁場は嘉永7年2月、石丁場用地として村から幕府へ提案。実際に切り出しが行われたかどうかは未詳。

(2) 小田原藩領の調達～相模国足柄下郡江之浦村の史料から～

No.1～No.8 石橋村・米神村・根府川村・江之浦村・岩村・真鶴村・吉浜村・門川村

→片浦筋土肥筋組合（組合村）14ヶ村に所属。箱根火山溶岩で良質な安山岩を産出。

→石橋と米神を除く6ヶ村が「石方六ヶ村」

- 「御用石御直段運賃積り書上帳」（八木下家文書 小田原市立図書館寄託） 嘉永6年8月
- ・根府川村・江之浦村・岩村・真鶴村・吉浜村・門川村が御台場御普請掛に提出した見積。
 - ・六ヶ村の石工が作業を行う。
 - ・石丁場での切り出し、河岸への運搬、普請現場への運搬を一式で請け負い、納品する。
 - ・石丁場が数10ヶ所に及ぶため、石の種類は様ではないが、いずれも寸尺に間違いのない堅石（安山岩）を納める。御用始めとなれば手本となる石材を納める。
 - ・石の質が悪いものは取り除くので、河岸に到着した時に見分して欲しい。
 - ・大御用につき、早朝から夜遅くまで人足を動員して切り出しを行う（約30日間従事）。
 - ・約30日間での切り出しは、角石・築石（直方体）9種1,959本、築石・間知石4種1,835本の計3,794本。
 - ・石工延べ人数518人（根府川28、江之浦25・岩150・真鶴80・吉浜160・門川75）

3. 伊豆石丁場の石材調達—沼津藩領と熱海市域の切り出し—

(1) 沼津藩領の調達～駿河国駿東郡口野村と獅子浜村の史料から～

沼津藩領→No.13 川奈村、No.15 稲取村、No.17 河津郷、No.29 口野村、No.30 獅子浜村

① 「差出申済口証文之事（御台場御用石切出し）」年欠

（口野村足立家文書 沼津市明治史料館寄託・保管）

- ・御台場御用石切り出しについて、請負人の治兵衛が村役人に提出した済口証文の下書き
- ・「旧冬」（嘉永6年冬と推定）、口野村字負越山で治兵衛が切り出し始める。
- ・「去四月中」（嘉永7年4月と推定）、同所で安治郎も切り出しを始める。

② 「（御台場御用石の件書状）」（嘉永7年）10月29日付（同上）

- ・伊勢屋次兵衛が口野村名主足立家隠居あて書状
- ・石丁場の所在不明ながら、同村から角石16本・蛇口石15本・間知石12本切り出し

※上記①②史料と沼津市の石丁場調査により、負越を品川御台場の石丁場と特定。

③ 「乍恐以書付奉歎願候（漁業差障につき石切出御免）」嘉永7年（1854）2月

（獅子浜植松家文書 沼津市明治史料館寄託・保管）

- ・獅子浜村役人が湯川村に出張中の御台場掛落合政之助に対し、村内の石材切り出しについて記した願書。
- ・「領主持林より海岸筋」での切り出しは、網曳場の存在、御林木の減少、海中に投棄される石材により漁業に支障が出るとして免除を願い出る。
- ・代地として楞嚴院境内山を提案。

↓

この時期、伊豆国の石材調達が遅滞しており、1月に江戸から御台場掛の松本金七が追加で派遣されている。同時に駿河国についても同時に調査を進め、石丁場を選定、切り出しを行ったと考えられる。

(2) 熱海市域の石材利用

現在確認されている熱海市内の石丁場遺跡→30ヶ所

中張窪・瘤木遺跡（下多賀）は、一部が国史跡「江戸城石垣石丁場跡（中張窪石丁場跡）」

品川御台場普請では、伊豆山村（伊豆山権現社領）、上多賀村・下多賀村（旗本鈴木氏領）

①伊豆山村の石材切り出し

- ・【史料1】「石丁場請負証文」天保11年（1840）8月（『熱海市史』資料編16号文書）

→門川村が嶽山丁場の石材切り出しを請け負う

- ・【史料 2】「門川村名主詫証文」嘉永 7 年（1854）2 月（『熱海市史』資料編 19 号文書）
→尾張藩の黒崎丁場に伊豆山権現の許可なく門川村が目印を建てたことに対する村の詫び証文。門川村が黒崎丁場の石材切り出しを請け負う。

②上多賀村・下多賀村の石材切り出し

- ・【史料 3】『内海御台場築立御普請御用中日記』嘉永 6 年（1853）12 月 6 日条
→御台場普請現場に多賀石が到着したことを記録。石垣の裏込めに使用か。
- ・【史料 4】『内海御台場築立御普請御用中日記』嘉永 7 年（1854）3 月 7 日条
→石丁場合計 20 ヶ村を記録。伊豆山村と多賀村（上多賀村・下多賀村）の石丁場から石材を調達したことがわかる。
- ・【史料 5】「足柄下郡板橋村石屋等御台場用石引請値段書上帳」嘉永 7 年（1854）5 月
→板橋村（小田原）の棟梁石屋善左衛門と甲州都留郡境村の天野海蔵による見積。品川第一・第二・第三台場の内部構造構築に必要な石材として、多賀より間知石 10 本切り出しが予定されている。
- ・【史料 6】『内海御台場築立御普請御用中日記』安政元年（1854）12 月 13 日条
第一・第二・第三台場の普請に多賀産の石材を、幕府が深川諸町家持政五郎から幕買い上げたことがわかる。
- ・【史料 7】『五番六番御台場之覚』嘉永 7 年（1854）
合計 34,178 本もの「多賀石」が第一・第二・第三台場の普請現場に搬入されたことが記録されている。

おわりに

- ①品川御台場普請は、江戸城築城以来となる幕府の威信をかけた一大土木事業であったが、地域社会の協力があつて初めて成功したものである。
- ②品川御台場普請については、幕府側、藩側、旗本側（いわゆる領主側）だけでなく、宿町村側の文献史料を探しつつ、沼津市のように石丁場遺跡の調査もしていく必要がある。文献史料で特に重要となるのが石丁場のある各村の史料。
- ③熱海市域を含め、江戸城築城・修繕に伴う石丁場遺跡がある地域は研究が進展。江戸城築城・修築時、築城後の境界争論、石場預かりの史料は見つかっているが、幕末は未開が多い。今後は、文献史料をさらに発見できるか、成果を石丁場遺跡の調査に繋げていけるかどうかが鍵。